

文殊菩薩の浄土經典

——蔵訳〈文殊師利仏土厳浄経〉第三函の和訳研究——

中御門 敬 教

〔抄 録〕

文殊菩薩の浄土經典である蔵訳〈文殊師利仏土厳浄経〉（以下、〈文殊仏国経〉）の翻訳研究を行う。当経は未翻訳であり、詳細な解題が存在しないため、その全体像の紹介を目的とする。当経は浄土教を大乘菩薩道の展開として捉える際にも、重要な位置を占める。この浄土經典を紹介することによって、壮大な文殊菩薩の世界観を示したい。

キーワード 〈文殊師利仏土厳浄経〉、文殊菩薩、菩薩学処、大波濤行、普覆王

はじめに

今回扱う範囲は当経蔵訳（北京版、大谷 No. 760-15、デルゲ版、東北 No. 59）の全体四函のうち第三函、範囲は（P. Wi. 308a-321a）（D. Ga. 271b-282a）である⁽¹⁾。第一函訳註は『佛教大学総合研究所紀要』21（2014）に、第二函訳註は『仏教文化研究』58（2014）に掲載予定である。翻訳の方針については上記拙稿に従った。解題的なものとしては『印度学仏教学研究』62-1（2013）に、「文殊の誓願行と浄土經典—〈文殊師利仏土厳浄経〉所説の「菩薩の学処」「大波濤誓願」「往生説」—」として掲載した。

第三函の所説の特徴を示せば以下のとおりである。

1. 文殊菩薩の前世者である「普覆王（Skt. Ambararāja）」の誓願行が中心になる。この普覆王誓願は寂天著〈集学論〉にも引用され、インド・チベットの大乗菩薩行の一伝統である「大波濤行の伝統」の起点になる。そして、その内容とする永続的な菩薩行は、例えば華嚴系統の普賢行や、浄土教系統の還相廻向にまで大きな影響を与えることになる。
2. 如来や仏塔のもとで菩薩が具えるべき十法ないし三法の記述は、菩薩学処や後の中観派の発心儀礼とも大いに関係する。
3. 空観をとおした問答を特徴とする文殊系經典である。

〈聖なる文殊の仏国土の功德莊嚴〉と名付けられた大乘經典

9. 菩薩が具えるべき九法

（P. Wi. 308b）（D. Ga. 271b）シャーリプトラよ、九つの法を具えるならば、菩薩は誓願から退かず、仏国土をも清浄にする。「九つ」は何かといえば、すなわち、

- 9-1. 身の〔制御した〕律儀と
- 9-2. 口の〔制御した〕律儀と、
- 9-3. 意の〔制御した〕律儀と、
- 9-4. 貪を取り除くことと、
- 9-5. 瞋を取り除くことと、
- 9-6. 痴を取り除くことと、
- 9-7. 欺くこと（slu ba）がないことと、
- 9-8. 友愛が堅固であることと、
- 9-9. 善知識を輕蔑しないことである。

シャーリプトラよ、それら九つの法を具えるならば、菩薩は誓願から退かず、仏国土をも清浄にする⁽²⁾。

10. 菩薩が具えるべき十法⁽³⁾

シャーリプトラよ、十の法を具えるならば、菩薩は誓願（D. Ga. 272a）から退かず、仏国土をも清浄にする。「十」は何かといえば、すなわち、

- 10-1. 有情地獄の苦を聞いて、怖れず憐れむ（悲）ことと、
- 10-2. 畜生の生処の苦を聞いて、怖れず憐れむことと、
- 10-3. 閻魔（gshin rje）の世間の苦を聞いて、畏れず憐れむことと、
- 10-4. 天の衰退を聞いて、畏れず憐れむことと、
- 10-5. 人の衰退を聞いて、畏れず憐れむことと、
- 10-6. 貧困と、飢饉と、盜賊と、自分の、馬と軍隊との害⁽⁴⁾を聞いて、怖れず憐れむ（悲）ことと、
- 10-7. 彼は、このように〔すなわち〕、どうあっても自己による仏国土には、有情地獄と、畜生の生処と、餓鬼の境遇とはなく、ただ思ったほどによって、食べものと、飲みものと、衣服が円満であることと、
- 10-8. 衆生たちも寿命が無量になっている。
- 10-9. 我所（私のもの）が無いし（nga'i ba med cing）⁽⁵⁾、
- 10-10. 無上の正等覺に決定する。そのような仏国土へ浄化していない間は、精進を捨てない（mi btang⁽⁶⁾ngo）、と発心することである。（P. Wi. 309a）

シャーリプトラよ、それら十の法を具えるならば、菩薩は〔立てた〕誓願から退かず、仏国土をも清浄にする。

如来や仏塔のもとで菩薩が具えるべき十法（その2） — 菩薩の学処⁽⁷⁾

1. シャーリプトラよ、さらに菩薩は華を携え、如来、あるいは如来の塔廟⁽⁸⁾のもとに行って、このように発心する—〔すなわち、〕「この華が香り甘く、色^{いろ}が良くて、見れば悦ばしい。意に叶い、美しいのと同じく、そのように私が、菩提（正覚）を得たその仏国土もまた種々の華が充満し、種々の宝の樹木によって莊嚴されますように。」というように発心する。同様に結びつけて、粉香（phye ma）と、薫香と、鬘（花輪）と、塗香と、乗り物と、衣と、食べものと、飲みものと、傘と、幢^{のぼり}と、幡^{はた}と、金と、銀と、毘瑠璃と、真珠と、螺貝と、水晶と、珊瑚にいたるまで、およそ何を献上してもいい。それらすべてを、(D. Ga. 272b) 仏国土の功德莊嚴を成就するために廻向し、戒の律儀（tshul khrims kyi sdom pa）に住することによって、戒の律儀に住するその菩薩の心の願（sems kyi smon pa）は成就するであろう。
2. シャーリプトラよ、さらにここで（'di la）⁽⁹⁾菩薩は、誰に対しても意に叶わない悦^{ことば}わなない句を述べず、意に叶う句のみを述べる。彼が菩提を得たその仏国土において、どの衆生も意に叶わない声を聞かない。意に叶う声のみ聞くであろう⁽¹⁰⁾。
3. シャーリプトラよ、さらにここで菩薩は、自己の安樂を求めず、他者の安樂により喜びと取らえる。彼が⁽¹¹⁾菩提を得た時、その仏国土の衆生たちは、最高の安樂（bde ba'i dam pa）によって満足するであろう。
4. シャーリプトラよ、さらにここで菩薩は、十善業道（dge ba bcu'i las kyi lam）を（P. Wi. 309b）常に断絶せずに正しく受けて成就する。その善根をもまた仏国土の功德莊嚴を円満に完成すべくために、一切智性（thams cad mkhyen pa nyid）に廻向する。彼が菩提を得た時、その仏国土の衆生すべては十善業道を具え、出離の智慧（'byung ba'i shes rab）をもった者になるであろう。
5. シャーリプトラよ、さらにここで菩薩は、どんな場所にしようとも、その場所において男、あるいは女、あるいは男の子、あるいは女の子、およそあらんかぎりの衆生—〔すなわち〕彼が見たそのすべて〔の衆生〕に、菩提を正しく摂受させて、誰に対しても声聞と独覚との乗の話を述べず、それ以外に仏の乗の話を述べる。彼が菩提を得た時、その仏国土において、あらんかぎりの生まれた衆生〔である〕彼らすべては、無上の正等覚に決定するであろう。声聞と独覚とは無く、菩薩の集い（tshogs）が満ちたその仏国土を得るであろう。
6. シャーリプトラよ、さらにここで菩薩は、他者の利得（rnyed pa）を奪わず、他者が〔利得を〕得たならば喜びと取らえる。彼が菩提を得た時、その仏国土において、(D. Ga. 273a) あらんかぎりの生まれた衆生、そのすべては、奪われない損われない円満と、法の大いなる得（'thob pa chen po）を具えるであろう。

7. シャーリプトラよ、さらにここで菩薩は、比丘または、比丘尼または、誰でもよいが、過失が生じたことによって論難せず、自己もまた身も妙法に対して加行する。彼が菩提を得た時、その仏国土において、過失の名もまったく無いであろう。それはなぜかといえば、彼ら衆生は、無過失の法を有するものが、清浄になるからである。

8. シャーリプトラよ、さらにここで菩薩は、(P. Wi. 310a) 法を欲しがり、希求するが、絶望することのない自性を有する者 (ran bzhin can) である。聞いたとおりの法について慰懃になすことによって、彼が菩提を得た時、その仏国土において、生まれたすべての衆生は、法をほしがり、希求するが、絶望することのない自性を有する者である。聞いたとおりの諸法について慰懃になすであろう。

9. シャーリプトラよ、さらにここで菩薩は、太鼓 (rnga bo che) と、螺貝 (dung)⁽¹²⁾ と、小鼓 (rdza rda) と、銅鑼 (khar rda) と、一絃琵琶 (bi bang rgyud gcig pa) と、多絃琵琶 (sgra snyan) と、手鈴 ('khar dkrol) と、管楽器 (gling bu) と、琵琶 (bi bang) と、ヴァルラキー (bal la ki)⁽¹³⁾ と、キムパラ (楽器名 kim pa la) 等々の音楽〔を演奏する〕楽器の、意に適う種々の資具によって、如来の塔廟⁽¹⁴⁾を供養し、その善根をも仏国土の功德莊嚴を成就するために廻向する。彼が菩提を得た時、その仏国土において、百千の楽器 (sil snyan) は奏でないで、打たないで、音 (sgra) を発するであろう。

10. シャーリプトラよ、さらにここで菩薩は、失念する (brjed ngas)⁽¹⁵⁾衆生たちに対して、憶念するであろう教誡により教誡する⁽¹⁶⁾。彼が菩提を得た時、その仏国土の衆生たちは禅食 (bsam gtan gyi zas) を有する者となる。

シャーリプトラよ、私は仏国土の功德莊嚴の円満に関して、あるいは劫を過ぎて法を教示しても、(D. Ga. 273b) 如来の辨才 (spobs pa) は窮尽することはないが、信解 (mos pa) と増上意樂が円満である、菩薩の乗の者 (theg pa pa)、彼ら良家の息子と、良家の娘とが聞けば、それは円満に完了するであろうもの (学処) を略説した。

菩薩が具えるべき三法— 菩薩の学処

シャーリプトラよ、三つの法を具えるならば、(P. Wi. 310b) 菩薩は速やかに無上の正等覺を現等覺し、思ったとおりの仏国土を成就するであろう。「三つ」とは何かといえば、すなわち⁽¹⁷⁾、

1. 不放逸 (bag yod pa) に住することと、
2. 聞いたとおりの法を慰懃に行うことと、
3. 殊勝な誓願 (別願 smon lam gyi khyad par)⁽¹⁸⁾である。

シャーリプトラよ、それらの三つの法を具えるならば、菩薩は速やかに無上の正等覺を現等覺し、思ったとおりの仏国土を成就するであろう。」

それから世尊に対して、具寿シャーリプトラはこのように申し上げる—

「世尊よ、それほどに如来が善くお説きになったことは驚異であります。世尊よ⁽¹⁹⁾、あらゆる菩提分法は「不放逸に住しています」⁽²⁰⁾。菩提は「慇懃に」住しています。仏国土の功德莊嚴の円満は「殊勝な誓願（別願）」によって成就します。」

世尊は宣べた—

「シャーリプトラよ、それはそのとおりである。あらゆる菩提分法は「不放逸に住している」。菩提は「慇懃に」住している。仏国土の功德莊嚴の円満は「殊勝な誓願（別願）」によって成就する。シャーリプトラよ、私はかつて、誓願を立てたそのとおりに、仏国土は円満に成就した。シャーリプトラよ、「不放逸に住する」ことにより、誓願を円満に完成した。シャーリプトラよ、私は「慇懃に」行ったので菩提を得た⁽²¹⁾。シャーリプトラよ、放逸に住しつつ、句の業 (tshig gi las) を尊重することと、不慇懃によっては、声聞の地 (nyan thos kyi sa) も成就できない⁽²²⁾〔。それ〕なら、(P. Wi. 311a) 無上の正等覚は言うまでもない。シャーリプトラよ、したがって〔名実ともに〕「菩薩」を正しい名 (yang dag pa'i ming) として (D. Ga. 274a) つけるよう誓うことを望む菩薩は、制定されたとおりのこの菩薩の学処 (byang chub sems dpa'i bslab pa ci ltar bcas pa) を学ぶべきである⁽²³⁾。」と。

それからその眷属の中から、八万四千の菩薩が各自の座から立ち上がった。合掌して、どの者も声をつにして⁽²⁴⁾、世尊に対して、このように申し上げた—

「世尊よ、我々は制定されたとおりのこの菩薩の学処を、学びましょう⁽²⁵⁾。慇懃に完全に完成しましょう。不放逸に住しましょう。諸誓願を円満に完成しましょう。仏国土の円満をまったく完成しましょう。思ったとおりの誓願を円満に完成していない間は、菩薩行を行いましょう。」と。

世尊の微笑

それから世尊はその時、微笑をなされた。それから世尊に対して、具寿シャーリプトラはどのように申し上げる—

「世尊が微笑をなされた因は何でしょうか。縁は何でしょうか。」と。

世尊は宣べた—

「シャーリプトラよ、あなたはどのように獅子吼をするこれら良家の子が見えますか。」と。

〔シャーリプトラは〕申し上げる—

「世尊よ、見えます。」と。

世尊による授記

世尊は宣べた—

「シャーリプトラよ、これら良家の子のすべては、十万の劫を過ぎて、無上の正等覚を現等覚するであろう。シャーリプトラよ、譬えば「獅子 (Seng ge)」⁽²⁶⁾という如来すべては (P. Wi.

311b)〔将来、〕別々の仏国土に生ずることを、私〔、世尊〕は見た。そのとおりに彼ら〔、将来の〕如来も名が「誓願莊嚴 (sMon lam bkod pa)」⁽²⁷⁾といわれるもののみとして、別々の仏国土に生ずるであろう⁽²⁸⁾。シャーリプトラよ、彼ら〔の将来の〕如来の仏国土も、如来・応供・正等覚者〔である〕無量光の仏国土⁽²⁹⁾における、(D. Ga. 274b) 仏国土の功德莊嚴は同じことであって、増減は無いであろう。寿命の量は除く。」

〔シャーリプトラは〕申し上げる―

「世尊よ、これら〔良家の子たちが成仏した時〕の寿命の量はどれほどになるでしょうか。」と。

世尊は宣べた―

「シャーリプトラよ、彼ら〔、将来の〕如来は各別であり、寿命の量は十劫ずつになる (bskal pa bcu bcur 'gyur ro)⁽³⁰⁾。」と。

獅子勇猛雷音菩薩による世尊への質問

それから獅子勇猛雷音といわれる菩薩摩訶薩は、まさにその眷属こそに集まっていた。坐っていて、座から立った。上衣を一方の肩にかけて、右膝の膝頭を地につけてから、世尊の〔居られる〕その場所の傍らで合掌して、拜んで、世尊に対して、このように申し上げる―

「世尊よ、このマンジュシュリー童子を、諸仏・世尊が賞讃しつつ讃歎したならば、世尊よ、このマンジュシュリー童子は、どれほどの時間において、無上の正等覚を現等覚し、彼の仏国土はどのようなものになるでしょうか。」と。

このように〔世尊に対して〕申し上げると、世尊は獅子勇猛雷音菩薩摩訶薩にこのように宣べた―

「良家の子よ、このマンジュシュリー童子こそに問いなさい。」と。

獅子勇猛雷音菩薩とマンジュシュリー― 空観による表明

それから (P. Wi. 312a) 獅子勇猛雷音菩薩摩訶薩は、マンジュシュリー童子にこのように述べた―

「マンジュシュリーよ、あなたはどれほどにおいて、無上の正等覚を現等覚することになるのですか。」と。

マンジュシュリーが述べた―

「良家の子よ、あなたは私に、一体、あなたは無上の正等覚に正しく発趣したのか、あるいは発趣しなかったのかと、先ず問うてください。それはなぜかといえば、良家の子よ、もし私が菩提に正しく発趣したならば、ゆえに現等覚もする〔という〕ならば、(D. Ga. 275a) 私が正しく発趣したことは無いので⁽³¹⁾、いかに現等覚するのでしょうか。」と。

〔獅子勇猛雷音菩薩摩訶薩は〕述べた―

「マンジュシュリーよ、あなたは衆生たちのために無上の正等覺に正しく発趣しなかったのですか。」と。

〔マンジュシュリーは〕述べた—

「良家の子よ、それはしなかった。なぜかといえば、衆生は認得しえない⁽³²⁾からです。良家の子よ、もし私がある衆生を認得するなら、ゆえに私も彼ら〔衆生〕のために、菩提のために正しく発趣する〔。それ〕なら、良家の子よ、何ゆえに衆生も〔実体としては〕無いし、命者は〔実体としては〕無いし、ブトガラも〔実体としては〕無い。ゆえに、私が発趣することは無い⁽³³⁾。退転することも無い。」と。

〔獅子勇猛雷音菩薩摩訶薩は〕述べた—

「マンジュシュリーよ、あなたは仏の法に発趣しなかったのですか。」と。

〔マンジュシュリーは〕述べた—

「良家の子よ、それはしなかった。それはなぜかといえば、良家の子よ、一切法は仏の法に発趣しています。法、ブドガラは〔実体としては〕無いし、繫属は〔実体としては〕無いし、兆相は〔実体としては〕無いし、相（定義、特徴）は〔実体としては〕無い—それが⁽³⁴⁾、仏に発趣したことです。一切法もまた、仏に発趣したこと、それと同じなので、仏に発趣したこと、それと同じでないことは無い。良家の子よ、何であれあなたがこのように、「あなた（マンジュシュリー）は仏の（P. Wi. 312b）法のために発趣しなかったのですか。」と述べたこと、それはあなたこそに問おう。あなたは忍ずるとおりに⁽³⁵⁾授記⁽³⁶⁾を教示しなさい（lung ston cig）。良家の子よ、これをどのように思いますか。色が菩提を願求する⁽³⁷⁾。あるいは色の自性（rang bzhin）、あるいは色の真如（de bzhin nyid）、あるいは色の体性（ngo bo nyid）、あるいは色の空性、あるいは色の寂性（dben pa nyid）、あるいは色の法性（chos nyid）が菩提を願求するのですか。良家の子よ、これをどのように思いますか。色が菩提を現等覺する。あるいは色の自性、あるいは色の真如、あるいは色の体性、あるいは色の空性、あるいは色の寂性、あるいは色の法性が菩提を現等覺するのですか。」と。（D. Ga. 275b）

菩提、菩薩に関する分析

〔獅子勇猛雷音菩薩摩訶薩は〕述べた—

「マンジュシュリーよ、それはできません。色が菩提を願求することはありません。色の自性と、色の真如と、色の体性と、色の空性と、色の寂性と、色の法性とが菩提を願求することはありません。色が菩提を現等覺することはありません。色の法性まで〔どれ〕もが菩提を現等覺することはありません。」と。

〔マンジュシュリーは〕述べた—

「良家の子よ、これをどのように思いますか。受と、想と、諸行と、識が菩提を願求する。あるいは識の法性まで〔どれ〕もが菩提を願求するのですか。良家の子よ、これをどのように思

いますか。識が菩提を現等覚する。あるいは識の法性まで〔どれ〕もが菩提を（P. Wi. 313a）現等覚するのですか。」と。

〔獅子勇猛雷音菩薩摩訶薩は〕述べた—

「マンジュシュリーよ、それはできません。受と、想と、諸行と、識とが菩提を願求することはありません。識の法性まで〔どれ〕もが菩提を願求することはありません。識は菩提を現等覚しません。識の法性まで〔どれ〕もが菩提を現等覚しません。」と。

〔マンジュシュリーは〕述べた—

「良家の子息よ、これをどのように思いますか。五蘊より〔離れた〕⁽³⁸⁾外側（phyi rol）に我（bdag）、あるいは我所（bdag gi）というものを仮設できますか。」と。

〔獅子勇猛雷音菩薩摩訶薩は〕述べた—

「マンジュシュリーよ、それはできません。」と。

〔マンジュシュリーは〕述べた—

「良家の子よ、そうであるならば、菩提を願求する法それは何かありますか。菩提を現等覚するものも、何かありますか。」と。

初業の菩薩の恐怖

〔獅子勇猛雷音菩薩摩訶薩は〕述べた—

「マンジュシュリーよ、あなたのような他の菩薩摩訶薩たちの証人⁽³⁹⁾となった、認識基準（tshad ma）となった者が、「私は菩提を願求することが無い、私は現等覚しない」と説いたなら、その教示を聞いたことによって、初業の菩薩（初発心菩薩）たちは（D. Ga. 276a）恐れるでしょう⁽⁴⁰⁾。」と。

マンジュシュリーは述べた—

「良家の子よ、一切の法は恐れることがない。真實際（yang dag pa'i mtha'）は恐れることがない。恐れることがないといわれるから、如來も法を教示する⁽⁴¹⁾。およそ恐れるもの、彼は厭うであろう。およそ厭ったもの、彼は貪を離れるであろう。およそ貪を離れたもの、彼は解脱した。およそ解脱したもの、彼は繫縛されたことはないであろう。およそ繫縛されたことのないもの、彼は執着しないであろう。（P. Wi. 313b）およそ執着することがないもの、彼は去ることはない⁽⁴²⁾。およそ去ることはないもの、彼は来ることはない。およそ来ることはないもの、彼は願求することはない。およそ願求することがないもの、彼は誓願を立てることはない。およそ誓願を立てることはないもの、彼は退転することがない。およそ退転することがないもの、彼は還滅する（phyir ldog pa）。何から「還滅する」のかといえば、我への執⁽⁴³⁾（bdag tu 'dzin pa）から還滅する。衆生への執と、命への執と、ブドガラへの執と、断絶への執と、常への執と、兆相（mthsan ma）への執より還滅する。分別から「還滅する」。いつか退出するその時、変異がないことによって、「退出しない」である。何から「退出しない」

かといえば、空性から「退出しない」。無相と、無願と、真實際と、仏の諸法から「退出しない」。そのうち、何かから「退出しない」ところの「仏の諸法」かといえば、離がないことが「仏の諸法」である。繫縛がないことが「仏の諸法」である。認得がないことが「仏の諸法」である。取がないことが「仏の諸法」である。棄がないことが「仏の諸法」である。現行（使用）がないことと、了別がないこと（rnam par rig pa med pa）と、ただ名ほどにすぎないもの（ming tsam du zad pa）と、空と、無生と、無滅と、無来、無去と、清浄がないことと、雑染を欠いていること（D. Ga. 276b）と、無塵と、離塵と、無我所⁽⁴⁴⁾と、無作意と、不相認がないこと（mi ldan pa med pa）⁽⁴⁵⁾と、無漏⁽⁴⁶⁾と、受けたことがないこと（blangs ba med pa）と、（P. Wi. 314a）平等と不平等とがないことが、「仏の諸法」である。

良家の子よ、それら「仏の諸法」⁽⁴⁷⁾は法でもない。非法でもない。それはなぜかといえば、それらについて、何かからこれらは「仏の諸法」であると述べる処（gnas）⁽⁴⁸⁾は、〔実体としては〕認得されない。

良家の子よ、初業の菩薩の誰かがこの教示を聞いて、恐れた彼らは、速やかに無上の正等覚を現等覚する。恐れなかった彼らは、何ものも現等覚しないであろう。」と。

〔獅子勇猛雷音菩薩摩訶薩は〕述べた—

「マンジュシュリーよ、何から考えて、このように教示するのですか。」と。

虚空と菩提

〔マンジュシュリーは〕述べた—

「良家の子よ、恐れた彼らは分別するであろう。およそ分別する彼らは、このように、「我々は菩提を現等覚しよう。」と思って、彼らは現等覚を具えようと発心した。どれほどか〔心を〕発したかぎり、現等覚する。およそそのような心を発さない彼らは、菩提として認得することがないし、心が慢心（rlom sems）をしない。菩提心として認得することが無いので、分別することがない。分別することがないその時、何をも現等覚しない。一体、なぜ何をも現等覚することがないのかといえば、その菩提を認得しないことによって、ゆえに現等覚することがない。良家の子よ、どのように思いますか。虚空界は菩提を現等覚しますか。」と。

〔獅子勇猛雷音菩薩摩訶薩は〕述べた—

「マンジュシュリーよ、それはできません。」

マンジュシュリーは述べた—

「良家の子よ、およそ世尊は（P. Wi. 314b）一切法は虚空と平等であると教示しましたか。」と。（D. Ga. 277a）

〔獅子勇猛雷音菩薩摩訶薩は〕述べた—

「マンジュシュリーよ、それはそのとおりです。」

マンジュシュリーは述べた—

「良家の子よ、したがって虚空のとおりに、菩提も同じである。菩提のとおりに、虚空も同じである。その虚空と菩提とは、二として無い。二として差別できない。誰かこのような平等性を知る者、〔その〕彼は少しも知ることがないし⁽⁴⁹⁾、それによって知らない者も誰もいない。」と。

煩惱からの解脱

この教示を説いた時、一万二千の比丘は、取がなくて（nye bar len pa med pa）、諸漏から心は解脱した。一万四千の天と人とは、法に対する法の眼が塵を離れて垢無く、清浄となった。九万六千の生きもの（生類 srog chags）は、かつて、〔心を〕発さなかったことから、〔今は〕無上の正等覚に発心した。五万二千の菩薩は無生法忍を得た。

それから獅子勇猛雷音菩薩摩訶薩はマンジュシュリー童子にこのように述べた—

「マンジュシュリーよ、あなたは、どれほど長い時から⁽⁵⁰⁾、無上の正等覚に発心してきましたか。」と。

正しく随見すること

マンジュシュリーが述べた—

「良家の子よ、黙りなさい。無生の諸法に対して、私は分別させない（ma gzhus）。良家の子よ、およそある者がこのように一、私は菩提に発心した。私は菩提のために行ずるであろう、と言うならば、まさにそのことが、（P. Wi. 315a）彼の大邪見となる。良家の子よ、私は何か心を菩提に対して発すべきもの、そのようなものを正しくは⁽⁵¹⁾随見（yang dag par rjes su mthong ba）しません。そのように私がその心を正しくは等随見しないことによって、菩提に対しても発心しません。」と。

〔獅子勇猛雷音菩薩摩訶薩は〕述べた—

「マンジュシュリーよ、「**正しくは随見しない**」というこの句の意味は何ですか。」と。

マンジュシュリーは述べた—

「良家の子よ、「**正しくは随見しない**」ということは、平等性（mnyam pa nyid）を教示する。」と。

〔獅子勇猛雷音菩薩摩訶薩は〕述べた—

平等性について

「マンジュシュリーよ、なぜ「**平等性**」というのですか。」と。

〔マンジュシュリーは〕述べた—

「良家の（D. Ga. 277b）子よ、「**平等性**」ということは、そこにおいて別異がない。その「**平等性**」によって、一切法は、すなわち空寂の理趣（dben pa'i tshul）⁽⁵²⁾として、一理趣（thsul

gcig) として〔すでに〕教示したので、〔ここでは〕一味だと述べるし、無雑染と、無清浄と、無断と、無常と、不生と、不滅と、無我所と、無摂と、無棄とのゆえに、法を教示し、無尋思であり、無分別である⁽⁵³⁾。良家の子よ、そのような法を「平等性」として証得する智慧を、「平等性」という。良家の子よ、さらに誰か菩薩が法性 (chos nyid) を了解する、〔その〕彼は界より別異とも「正しくは随見しない」、同一とも「正しくは随見しない」⁽⁵⁴⁾。これが「平等性」である。「平等性」であること、それは不平等が無い。「不平等が無いこと」、それは、本来清浄である⁽⁵⁵⁾。」と。

世尊と獅子勇猛雷音菩薩— マンジュシュリーの発心

それから世尊に対して、獅子勇猛雷音菩薩摩訶薩はこのように申し上げた— (P. Wi. 315b)
「世尊よ、このマンジュシュリー童子は、これほど〔の久しい過去〕から、私は無上の正等覚に発心している、というように示しません。これらの眷属は、聞くことを求めています。」と。
世尊が宣べた—

「良家の子よ、このマンジュシュリー童子は、甚深の忍 (zab mo'i bzod pa) を具えている。それもまた⁽⁵⁶⁾、どれほどか菩提も認得されない。心も認得されない。それほどに〔同様に〕「甚深の忍」を具えている。それによって菩提心は認得されないのので、「私は、これほど〔の久しい過去〕から、無上の正等覚に心を発している。」というように示さない〔。それ〕なら、良家の子よ、マンジュシュリー童子はどれほどの長い時から、無上の正等覚に発心したと示すべきだろうか。良家の子よ、以前に生じた過去の時、ガンジス河の砂〔の数〕ほど〔の無数〕の七十万の無数の劫⁽⁵⁷⁾を過ぎ、(D. Ga. 278a) その彼方のまたはるか彼方、その時期 (tshe)、その時 (dus) に、如来・応供・正等覚者〔である〕雷声音王 ('Brug sgra'i dbyangs kyi rgyal po) という、明行足・善逝・世間解・無上士調御丈夫・天人師〔である〕仏・世尊が世間に出現なされた。

東方に向かった生賢世界の雷声音王仏と普覆王

この仏国土より東方に〔向かい〕、九十二ガンジス河の砂〔の数〕ほどの〔無数の〕仏国土を過ぎ去った〔ところ〕に、「生賢 ('Byung ba bzang po)」⁽⁵⁸⁾ という世界が生じた。そこでは、世尊・如来〔である〕雷声音王という者、彼が法を教示する。その時 (P. Wi. 316a) かの世尊の声聞の集会 ('dus pa) は、八百四十万コーティ・ナユタになった。菩薩の集会は、その二倍になった。

普覆王の登場 (マンジュシュリーの前世者)

その時、普覆王 (Skt. Ambararāja, Tib. rGyal po Nam mkha')⁽⁵⁹⁾ という法に適った者、転輪法王、七宝⁽⁶⁰⁾を具えた者が出た。良家の子よ、普覆王という、彼の子と妻と親戚⁽⁶¹⁾とを眷

属として持った者は、他の行為がなく、厭倦のない心をもって、声聞の僧伽と菩薩の僧伽とを具えた、かの雷音声王如来に対して、八万四千年にわたって、罪のない別々の食物の種類⁽⁶²⁾と、罪のない別々のま新しい衣服と、別々のま新しい宮殿楼阁と、罪のない別々の奉仕（rim 'gro）と、安楽に結びつけることすべてによって奉仕を行った。そのように八万四千年が過ぎた後で、彼は一人、閑寂処において、〔連れと〕二人にならず居続けた意^{こころ}において、このような種類の心を発した。私は多くの善根を造作しても、それらは決定のない心により（D. Ga. 278b）造作してから⁽⁶³⁾、今やそれら善根もまた廻向しようと思って、彼はこのように考えた―「この善根をシャクラ（帝釈天）〔になるため〕に廻向する、あるいはブラフマー（梵天）〔になるため〕に廻向する、あるいは転輪聖王〔になるため〕に廻向する、あるいは声聞〔になるため〕に廻向する、あるいは独覚〔になるため〕に廻向する、あるいは誰〔になるため〕に廻向しようか。」と。良家の子よ、王がその思いをそのように発すやいなや、上の虚空から多くの天たちが声をひびかせた―（P. Wi. 316b）

「大王よ、そのように劣った心（dma' pa'i sems）を発してはいけない。それはなぜかといえは、あなたは広大な福德の蘊を廣大に造ったので、大王よ、無上の正等覚に発心しなさい。」といった。良家の子よ、その時、その普覆大王は大きな歡喜と最上の歡喜とが生じた。彼はこのように思った―「私は菩提から退転しない。それはなぜかといえは、諸天は私の心を遍知して、声をひびかせた。」

良家の子よ、それからその普覆王は、八百万コーティ・ナユタの生きものによって囲まれて、前方に進んだ。世尊・如来〔である〕雷音声王のその場所に行き、着いて、世尊の御足に頭でもって礼拝した。世尊に対して七度圍繞して、一方〔の座〕に坐った。

良家の子よ、それから、かの普覆王という者は、世尊・如来〔である〕雷音声王の〔居られる〕その場所の傍らで合掌して、拜んで、世尊に対して、この偈頌を申し上げる―

普覆王（マンジュシュリーの前世者）の誓い― 普覆王誓願⁽⁶⁴⁾

「あなたの御前^{おんまえ}で⁽⁶⁵⁾妙法（dam chos）を尋ねます。どんな形相により最高の善士（skyes bu'i dam pa mchog）が生ずることになるのでしょうか。導師は私にお説きになってください。

(1)

導師よ、あなたに現前に、広大な供養をなし続けても、決定の無い心によって行ったので、何にも廻向しませんでした。(2)

私は一人、閑寂処に住する時、このような心が（D. Ga. 279a）生じました。私が大きな福德を積んだのなら⁽⁶⁶⁾、どのように完全にそれを（P. Wi. 317a）廻向しようか、と。(3)

ブラフマーに廻向する、またはシャクラに廻向する、あるいは四大洲の自在者（転輪王）〔の位〕を得る、または声聞の存在（dngos po）に、あるいは独覚〔の位〕を得るために廻向しようか、と。(4)

そのように彼が発心するやいなや、諸天は声を発し述べた。劣った心をもって、この福德を消耗 (rnam par chud gzon) してはならない。(5)

一切衆生を益するために、大波濤の〔ような〕誓願 (smon lam rlabs chen)⁽⁶⁷⁾を立てなさい。菩提心を発して、諸々の世間の利益 (don) をなしなさい、と。(6)

したがって、法の自在主 (chos kyi dbang phyug gtso)、正等覺者に私は尋ねます。牟尼よ、どのように心を発せば、正等菩提が生ずるのでしょうか。(7)

その智慧は何によって得るのでしょうか。その利益 (don) を私に教示してください。菩提心を発したし、あなたのような牟尼に〔なるよう〕、私も願求します。(8)

その句を彼がお聞きになって、〔その〕如来は宣べました⁽⁶⁸⁾。大王よ⁽⁶⁹⁾、知りなさい。順序をおってあなたに教示しよう。(9)

一切諸法は縁のとおりであり、願樂の根本に ('dun pa'i rtsa la) 住している。およそ誰か誓願を立てたものは、そのような果を得るであろう。(10)

大王よ、私⁽⁷⁰⁾も以前、正等菩提の心を発しました。一切衆生を益するために、私は優れた誓願を立てました。(11)

誓願を立てたとおりに、私は果を得ました。優れた菩提を私は得たので、私の思惟 (bsam pa) は完成しました。(12)

大王よ、堅固に為し⁽⁷¹⁾、不変の心 (mi 'gyur sems) を発しなさい。もしも行を行ったならば、あなたも (P. Wi. 317b) 正等覺するでしょう、と。(13)

その牟尼のお言葉を聞いてから、かの大王は喜びました。世間すべて〔の者〕の現前で、獅子吼においてこの句を述べました。(14)

輪廻の終わりは無いが、始まりの終わりがあるかぎり、そのかぎり衆生を益するために、無量の行を行いましょう⁽⁷²⁾。(15)

世間主のこの御前において、(D. Ga. 279b) 最高の菩提に心を発しました。一切の〔世の〕衆生を招待し、困窮と貧苦とから、〔彼らを〕救度しよう⁽⁷³⁾。(16)

今日以降、もしもまた私が貪の心を発したならば、十方に居られる一切諸仏を欺くことになろう (sangś rgyas thams cad bslus par 'gyur)⁽⁷⁴⁾。(17)

いつか菩提を得るまでに、忿怒 (tha ba) の心と、害心 (gnod sems) と、嫉 (phrag dog) と、慳^{ものおしみ} (ser sna) も、今日以降なしません⁽⁷⁵⁾。(18)

梵行を私は行いましょう。罪惡の欲望を完全に捨て、戒の律儀と善良さについて、仏に随って学びましょう⁽⁷⁶⁾。(19)

私は菩提を速すぎる仕方 (rings tshul du) で証覺することを信解し、喜ぶことはありません。後の辺際 (未来) に至るまでも、一人の衆生のために行いましょう⁽⁷⁷⁾。(20)

無量で不可思議な仏国土を浄化しましょう。十方すべてにおいて、私は〔自分の〕名前を聞かせましょう⁽⁷⁸⁾。(21)

私は自己に対して授記しました⁽⁷⁹⁾。仏に成ることに疑いはありません。私の増上意樂は清浄です。私はこの証人として、導師たちよ、(22)

身と語の諸業も、全面的（一切相）に私は浄化しましょう。意の業も浄化しましょう。不善業を行いません⁽⁸⁰⁾。(23)

未来の時に成仏して、(P. Wi. 318a) 世間主になるのか、といえば、その真実 (bden pa) によってこ〔の大地〕も、六種に震動せよ⁽⁸¹⁾。(24)

私が何か真実語 (bden tshig) を述べたことが、誤らず、正しく述べられたと知るならば、その真実によって、虚空界より、諸楽器の音が響け。(25)

私にもしも詔 (gyo) がなく、同様に忿怒がないというならば、賢れたマンドラ華が、その真実によって、雨として降れ。(26)

正しい内容 (don) に決定した真実語をそのように述べると、十方の無辺のすべてのコーティの諸〔仏〕国土が震動した。(27)

その瞬間に、虚空界からコーティの楽器の音も生じた。諸々のマンドラ華が、人の身長七つほど降った。(28)

その王に随学して、二十コーティの生きものの⁽⁸²⁾、導師に対して私たち (D. Ga. 280a) は願求する、という快い声もひびかせた。(29)

そのように二十コーティの生きものすべても、最高の王に随学し、最高の菩提に発趣した。(30)」

普覆王とマンジュシュリー

良家の子よ、その時期、その時に、転輪王〔である〕普覆 ('Khor los sgyur ba'i rGyal po Nam mkha') という者が出現した、彼は他の者であると、あなたが思うなら、あなたはどのように見てはいけない。それはなぜかといえば、まさにこのマンジュシュリー童子こそが、その時期、その時に、転輪王〔である〕普覆という者であった。このマンジュシュリー童子が、菩提に心を発した以後、七十万の無数のガンジス河の砂〔の数〕ほどの劫が過ぎ去った。無生法忍を (P. Wi. 318b) 得てからも、六十四のガンジス河の砂〔の数〕ほどの劫が過ぎ去った。それから始まって、この者は如来の十力を円満に完成した。この者は菩薩の十地すべてを円満に完成した。この者は仏地を円満に完成した。この者はすべての仏法をも円満に完成した。どんな間も彼は、自己が〔未来に〕菩提を現等覚するだろうか、しないだろうかという心一つも発さなかった。良家の子よ、世尊・如来〔である〕雷音声王の御前において、その王といっしょに菩提心を発したそれら二十コーティの生きものすべても、無上の正等覚を正覚して、法輪を転じた。無量無数の衆生のために仏のなすべきこと⁽⁸³⁾を為してから、仏の涅槃をもって般涅槃した⁽⁸⁴⁾。彼らすべてをも、このマンジュシュリー童子が布施に正しく入れた。同様に戒と、忍と、精進と、静慮（禪定）と、(D. Ga. 280b) 智慧とに正しく入れた。誰に対しても

奉事と受用とを行なった⁽⁸⁵⁾。誰もが⁽⁸⁶⁾妙法を受持した。ただ一人の如来以外は、この仏国土から下方に、別に四万四千のガンジス河の砂〔の数〕ほどの〔無数の〕仏国土を過ぎ去った〔ところ〕に、(P. Wi. 319a)「地音 (Sa'i dbyangs)」⁽⁸⁷⁾という世界がある。そこには、地天 (Sa'i lha) という如来が、無量の菩薩の僧伽⁽⁸⁸⁾と、寿命は無量にして居られた。彼は現在も居られる。〔すなわち〕生きて、住している。

この過去物語 (sngon byung ba'i le'u)⁽⁸⁹⁾を教示した時、七十万の生きものは無上の正等覚に心を発した⁽⁹⁰⁾。

獅子勇猛雷音菩薩とマンジュシュリー

それから獅子勇猛雷音菩薩は、マンジュシュリー童子に対して、このように述べた—

「マンジュシュリーよ、もしもそのようにあなたが、如来の十力をも円満に完成し、菩薩の十地をも円満に完成し、仏地をも円満に完成し、すべての仏法をも円満に完成したならば、どうして無上の正等覚を現等覚しないのですか。」と。

そのように〔獅子勇猛雷音菩薩は〕述べると、マンジュシュリー童子は獅子勇猛雷音菩薩に対して、このように述べた—

「良家の子よ、仏法を円満に完成したならば、たびたび菩提を現等覚すべくありません。それはなぜかといえば、彼は菩提を得たので、〔すでに〕得おわったもの (thob zin pa) は元来 (gzod) 得べきではありません。」と。

〔獅子勇猛雷音菩薩は〕述べた—

「マンジュシュリーよ、仏法を円満に完成したというのはどういうことですか。」と。

〔マンジュシュリー童子は〕述べた—

「良家の子よ、真如 (de bzhin nyid) を円満に完成すること、それが諸々の仏法を円満に完成することである。虚空を円満に完成すること、それが諸々の仏法を円満に完成することである。(P. Wi. 319b) (D. Ga. 281a) そのように虚空と、諸々の仏法と、真如⁽⁹¹⁾というこれは、無二 (gnyis su med) であり、二に差別できない。良家の子よ、諸々の仏法を円満に完成することは何であるかといえば、そのように言うのについて (de skad zer la)、色を円満に完成することと、受と、想と、諸行と、識とを円満に完成すること、それが諸々の仏法を円満に完成することである。」と。

〔獅子勇猛雷音菩薩は〕述べた—

「マンジュシュリーよ、色を円満に完成することは、どのようなことか。受と、想と、諸行と、識を円満に完成することはどのようなことか。」と。

〔マンジュシュリー童子は〕述べた—

「良家の子よ、あなたは、色の常、あるいは無常を正しく随見しますか。」と。

〔獅子勇猛雷音菩薩は〕述べた—

「マンジュシュリーよ、それは見えません。」と。

マンジュシュリーが述べた—

「良家の子よ、およそ法は常でもなく、無常でもない— それにおいて円満に完成すること、あるいは減少すること⁽⁹²⁾は有りますか。」と。

〔獅子勇猛雷音菩薩は〕述べた—

「マンジュシュリーよ、それは有りません。」

マンジュシュリーが述べた—

「良家の子よ、そのように法を円満に完成することもなく、減少することも⁽⁹³⁾ない、それを「円満に完成する」という。」と。

法の完成

〔獅子勇猛雷音菩薩は〕述べた—

「彼は法は何により、いかにして円満に完成したというのですか (des chos ces / cis yongs su rdzogs shes bya)。」⁽⁹⁴⁾と。

〔マンジュシュリー童子は〕述べた—

「彼は法を知るとおりに、智慧が起こることになる。いつか智慧が起こった時も、尋思しないし、分別しない。尋思しない、分別しない時、円満に完成すること、あるいは減少させることはない。円満に完成すること、あるいは減少させることがないこと、それが平等性である。良家の子よ、したがって色の平等性を見ること、それが色を円満に完成することである。(P. Wi. 320a) 受と、想と、諸行と、識との平等性を見ること、それが識を円満に完成することである。」と。

衆生を菩提へ悟入させること— 空観の視点

それから、獅子勇猛雷音菩薩摩訶薩は、マンジュシュリー童子に対して、このように述べた— (D. Ga. 281b)

「マンジュシュリーよ、そのようにあなたは、長い時から忍を得ても、自分は菩提を得よう、という発心が一度も生ずることがないならば、マンジュシュリーよ、あなたは、今どのように、他の衆生たちを菩提に正しく摂受させるのですか (khyod kyis de⁽⁹⁵⁾ji ltar sems can gzhan dag byang chub la yangs dag par gzung bar bya)。」と。

〔マンジュシュリー童子は〕述べた—

「良家の子よ、私はいかなる衆生も菩提（正覚）に正しく悟入させません。それはなぜかといえば、衆生は〔実体として〕無く、衆生は空寂であるからである。良家の子よ、衆生を認得すること、それをもって菩提（正覚）をも認得する。何か「菩提（正覚）を認得する」〔ところの〕彼は、菩提（正覚）に衆生たちを正しく発趣させることによってである。良家の子よ、私

は菩提（正覚）も認得しない。衆生も認得しないので、そのように菩提（正覚）に衆生たちを悟入させない。平等性は菩提（正覚）を願求させることも無い。それ（菩提）より退転することも無い。それはなぜかといえば、平等性を分別しないので、のよう平等性を願求することがない（smon pa med do）。退転することがない。ゆえに諸行（du 'byed rnams）について、どこから来ることも無く、そしてどこへも行くことはない。それが「平等性」である。良家の子よ、「平等性」というもの、それは空性の句⁽⁹⁶⁾である（stong pa nyid kyi tshig）。「空性」については、どんな願求も無い（無願）。良家の子よ、(P. Wi. 320b) 何れにせよあなたがこのように、そのように長い時から、忍を得たならば（得たとしても）、「なぜに私は菩提を現等覚しようか〔、いやしない〕」というように、〔私、マンジュシュリーが〕発心していない言うことは、良家の子よ、あなたは、どんな心によって、そのような得べき菩提を正しく随見するのか。」と。

〔獅子勇猛雷音菩薩は〕述べた—

「マンジュシュリーよ、それは見ません。それはなぜかといえば、心（sems）には色は無く、教示しえないので、菩提（正覚）もただ名前ほです。^{こころ}意（yid）から生じていないので、「菩提」というもの、あるいは心というものは、ただ名前ほです。「ただ名前ほ」であること、それは空寂であり、無作用（byed pa med pa）である。」と。

〔マンジュシュリー童子は〕述べた—

「良家の子よ、それより考えて、私は菩提をどのように得ようという心を発することがない（D. Ga. 282a）と述べたのです。それはなぜかといえば、その「心」は生じていない（ma skyes pa）。「生じていないもの」に生ずることはない。およそ「生ずることのないもの」、それに得べきことと現観されるべきこと（mngon par rtogs par bya ba）⁽⁹⁷⁾も、およそ何があるのか。」と。

現観と得について

〔獅子勇猛雷音菩薩は〕述べた—

「マンジュシュリーよ、「現観（mngon par rtogs pa）」とはどのようなことか。」と。

〔マンジュシュリー童子は〕述べた—

「良家の子よ、およそ一切法を慢心なく、平等性として了解すること—これが「現観」という。塵ほどの想いも生じないし滅しない。そのように証得するそれが「現観」という。真如と無錯誤である真如を分別しない。それが「現観」という⁽⁹⁸⁾。正見をもって発趣した（yang dag pa'i lta bas zhugs te）、平等性において、いかなる法をも認得せず、認得しないことをもって、同一あるいは別異としないし、慢心をしないこと、これが「現観」という。およそ一切法、これは無相として一つの相（特徴）として⁽⁹⁹⁾身によって現前にし、(P. Wi. 321a) 知っても身において固執⁽¹⁰⁰⁾することがない（mngon par zhen pa）。心においても固執することがな

い、これが「現觀」を得ることである。」という。

〔獅子勇猛雷音菩薩は〕述べた—

「マンジュシュリーよ、「得る」というそれはどのようなことか。」と。

〔マンジュシュリー童子は〕述べた—

「良家の子よ、それは現行の無い〔という〕句である。ゆえに、「得る」という。その「現行」は、三界における言説として、これである、と表示できない。聖者たちの得たものであるそれは、不可説である。それはなぜかといえ、その法は依処⁽¹⁰¹⁾がなく、現行が無いので、ゆえに「不可説」である。良家の子よ、さらにそれは、得ることが無い〔という〕ことから、「得る」という語に述べる。それはどんな法を得たのでもない。得ていないのでもないので、ゆえに「得」たという。」と。

〔注〕

- (1) 漢訳の対応箇所は以下のとおりである。
 - ・西晋竺法護訳『文殊師利仏土厳浄経』（『大正蔵』11, No. 318, pp. 894c25-898b23）
 - ・唐実叉難陀訳『大宝積経』『文殊師利授記会』（『大正蔵』11, No. 310-15, pp. 343b21-347a6）
 - ・唐不空訳『大聖文殊師利菩薩仏刹功德莊嚴経』（『大正蔵』11, No. 319, pp. 910b3-914b2）
- (2) 浄仏国土思想については、以下の藤田〔2007〕p. 385を参照。

「土を浄む」とは何かといえ、もとはインド初期大乘仏教の「仏国土を浄める」ということ、漢訳は一般に「浄仏国土」と呼ばれる思想に由来するものと考えられる。それは、大乘仏教の菩薩たちが、それぞれ未来に仏となると、自己の出現すべき国土を清浄化することを意味する。清浄化するというのは、その国土を形づくっている衆生を清浄な道すなわち解脱・涅槃の道に入らしめ、仏道を完成せしめることである。これは、大乘の菩薩の自利利他の誓願と実践を達成することであり、それによって実現した世界が「浄らかな土」すなわち「浄土」にほかならない。つまり、浄仏国土思想とは、大乘仏教の菩薩思想を表す代表的な思想形態と言ってもよい。〈般若経〉〈法華経〉〈華嚴経〉などの初期大乘經典の随処に「仏国土を浄める」という意を表すサンスクリット表現 (buddhakṣetrapariśuddhi ; kṣetram pariśodhayati, etc.) が用いられるのは、このことを示している。」
- (3) 以下の10-1～10は不空訳には欠如。竺法護訳には対応あり。
- (4) 実叉難陀訳：怨敵殺害
- (5) 実叉難陀訳：無彼我心
- (6) D. gtong
- (7) 不空訳では以下の十法が10-1～10に相当する。
- (8) 実叉難陀訳：如来処、或仏塔所、不空訳：如来所、或窣堵波
- (9) 「ここで (di la)」は、1. には出ずに2～10に出る。よってその場所は、1. に出る「如来、あるいは如来の塔廟のもと」を指す可能性が高い。この前後に説かれる諸法が、後では「制定されたとおりの菩薩の学処」と呼ばれており、当経では、そうした学処を受ける場の一つに仏塔が指定されているようである。その学処は発心と結びつけられているが、後の中観派の発心儀礼においても、当経の「普覆王誓願」が重要な役割を果たす (Cf. 山本〔2005〕、拙稿前掲印仏論文)。なお、ここでの主語は「菩薩」であるが、学処の内容が極めて出家主義である点から、実際は出家者が菩薩戒を受けた状態（出家菩薩）を示す可能性が高い。部派僧団の出家者が仏塔供養を行った点については、佐々木閑『インド仏教変移論』（大蔵出版、2000、pp. 322ff.）を参照。
- (10) 不空訳は2. と3. とが交替している。

- (11) P. de la, D. de 実叉難陀訳と不空訳を見ればデルゲ版の読みが良い。菩薩が主語である。
- (12) 実叉難陀訳：なし、不空訳：商佉
- (13) Skt. vallakī インドの弦楽器の一種。
- (14) 実叉難陀訳：なし、不空訳：如来寧堵波
- (15) 二十随煩惱の一。
- (16) P. 'doms, D. 'dems
- (17) 一から十まで法数を出したあとに、三法が出る。前後の関係が分かりにくい。
- (18) 竺法護訳：所（発）願特尊与衆不共、実叉難陀訳：大願殊勝、不空訳：殊勝誓願
総願（四弘誓願など）、別願というところの、別願に相当する。
ここでは、菩薩が自身の仏国土を建立するため修行が説かれている。竺法護訳の時点ですでに整理されている。実叉難陀訳は誓願の重要性を強調するために、あえて一番目に出した可能性がある。「何等為三。一者大願殊勝。二者住不放逸。三者如所聞法起正修行。是名為三」と出す。
- (19) チベット訳は呼びかけに見える。漢訳は主格である。
- (20) 不空訳：世尊由住不放逸故、獲得一切菩提分法、実叉難陀訳：世尊住不放逸故、得菩提分法
- (21) 実叉難陀訳の「我往昔」というように過去の因縁話である。
- (22) 菩薩乗の無上正等覚との比較対象として、声聞地を出す。
- (23) 実叉難陀訳：如菩薩所學應如是學、不空訳：於諸學處應如是學
大乘戒經としての意義付けが当經にあるという言明。ただし、厳密に言えばこの学処が、①一法～十法、②仏塔のもとでの十法、③最後の三法の三つを総称したものか、あるいは上記の三つのどれか一つを特定したものかは、定かではない。解題的なものとしては、拙稿前掲印仏論文に掲載した。
- (24) 実叉難陀訳：同声白言、不空訳：異口同声白言
- (25) 実叉難陀訳、不空訳：如仏所説菩薩學處、我當隨學
- (26) 実叉難陀訳、不空訳：獅子吼
- (27) 実叉難陀訳、不空訳：願莊嚴
- (28) 不空訳、実叉難陀訳：当來師子仏等
仏の出生と関係して同名の仏が多数出現するものに、例えば〈法華經〉「五百弟子受記品」(Cf. Kern, Nanjio [1977] pp. 206-207、姚秦鳩摩羅什訳『妙法蓮華經』(『大正蔵』9, No. 262, p. 28 b23-c6))、〈無量寿經〉(Cf. 藤田 [2011] p. 79、伝支謙訳『大阿彌陀經』(『大正蔵』12, No. 362, p. 309b)、辛嶋静志「『大阿彌陀經』訳註(五)」(『佛教大学総合研究所紀要』11、2004、pp. 92-93))がある。
- (29) 実叉難陀訳：無量寿国、不空訳：無量寿如来刹土
- (30) 実叉難陀訳、不空訳：皆寿十劫
- (31) 勝義の立場での発言。因も果も無自性。
- (32) 対象として認識できないこと。
- (33) ここの「衆生、命者、ブドガラ」は我の別名。無我説の説明なので「無し」を用いた。例えば〈金剛般若經〉cp. 3は「我、人(ブドガラ)、衆生、寿命」を出し、それらが無我であると説く。
- (34) 般若經類に見られる、典型的な逆接的表現。
- (35) 容認、認識という意味。例えば、無生法忍、十六智忍。
- (36) 現代語ならば「明確に述べること」の意味。
- (37) 実叉難陀訳、不空訳：為色求菩提耶(色は菩提を求むとなすや)
初期經典から一切法は五蘊などとされることを前提とする。衆生などの仮設の所依である五蘊と菩提(正覚)の関係が以下に述べられる。
- (38) 仮設の所依を離れて、という意味。
- (39) P. dpang, D. dbang 文脈より北京版の読みを採用する。実叉難陀訳：所言衆皆誠信、不空

訳：便為定量

- (40) 菩提を求める主体である菩薩が実在しないことを説いて、恐怖するかという設定は、〈八千頌般若經〉cp. 1にも出る。
- (41) 実叉難陀訳：如来為於無驚怖者而演說法、不空訳：仏為於無驚怖者而演說法
- (42) 「煩惱がない者は輪廻しない」といった含意。
- (43) この「執」は認識としてのそれである。煩惱である「執着」ではない。
- (44) P. bdag gi med pa, D. bdag gi ba med pa デルゲ版の読みを採用した。
- (45) 実叉難陀訳：無和合、不空訳：無尽
文脈や漢訳の読みからは「mi」は不要である。
- (46) P. zad pa, D. zag pa デルゲ版の読みを採用した。
- (47) 大きく分けて、教（Skt. āgama）と証得（Skt. adhigama）の二種（Cf. 櫻部建、小谷信千代、本庄良文『俱舍論の原典研究 智品・定品』大蔵出版、2004、p. 355）。細かく分けて『釈軌論』の法義の十種類（Cf. 小谷信千代『法と行の思想としての仏教』文栄堂、2000、p. 41）。
- (48) 属性と基体というところの後者。
- (49) 実叉難陀訳：無有知、不空訳：無所知
- (50) 実叉難陀訳、不空訳：来為幾時耶
- (51) 「正しくは」「真実には」を付けることによって、虚無論ではないことを示すことができる。ツォンカパの言う否定対象の限定。「勝義としては」「自性によって」など同様の意味がある。
- (52) あり方、道筋を意味する。
- (53) 実叉難陀訳：不念我說亦無分別、不空訳：無所思亦無分別
- (54) 同一でなく別異でない、は中観に良く出る表現。
- (55) 同じ文殊系仏典である〈阿闍世王經〉は、罪惡との関係で心性本浄説を説く。
- (56) 不空訳の「乃至」は、de yang も含んでいるようだ。
- (57) 実叉難陀訳に一致する。不空訳は「七十万阿僧企耶千万〜」である。
- (58) 実叉難陀訳、不空訳：無生 「妙生」の誤字か。
- (59) Skt. ambara は「取り巻く、覆う」という意味が基本の語。漢訳の実叉難陀訳では「普覆」、不空訳では「虚空王」とされる。なお以下の話は、人天乗を望まず仏果の獲得が目指されている。
- (60) 金、銀、瑠璃、玻璃（水晶）、砮磤、赤珠（珊瑚）、瑪瑙。あるいは転輪王七宝（金輪宝、白象宝、紺馬宝、神珠宝、王女宝、主藏宝、主兵宝）。
- (61) P. gnyen mang ba dang, D. gnyen 'dab dang 実叉難陀訳、不空訳には「多」はなし。デルゲ版の読みを採用した。
- (62) 律蔵に抵触しない供物を指しているのか。以下、同じく。
- (63) P. nas, D. na 北京版の読みを採用した。実叉難陀訳：我今已集、不空訳：我已積集
「八万四千年してから、今」ということ。
- (64) 中観派の発心儀礼と普覆王誓願との関係については、山本〔2005〕pp. 36-38を参照。寂天著〈集学論〉cp. 1には普覆王誓願の vs. 15-16, 18-21, 23が引用される（Cf. 【梵本】Bendall〔1977〕pp. 13-14=【蔵訳】D. 東北 No. 3940, Khi. 10b3ff.=【漢訳】法称菩薩造、宋法護等訳『大乘集菩薩学論』（『大正蔵』32, No. 1636, p. 78b13ff.）=【英訳】Bendall〔1990〕pp. 14 ff.）。引用・関連文献については山本 *ibid.*, pp. 38-39を参照。蓮華戒著〈修習次第〉前篇、アティシャ著『菩提道灯論細疏』末尾、ジターリ著『菩提過犯懺悔註菩薩学次第』の用例が提示される。その他、vs. 15については伝陳那著〈行願讃釈〉v. 44がある。この当たりの事情は、拙稿印仏前掲論文を参照。ツォンカパは『大乘集菩薩学論の覚え書き（Tib. bSlab btus zin bris）』（Cf. 東北 No. 5398, Pha. 4aff.）に発心儀礼や関係する菩薩学処の規定を出す。その本行（dngos gzhi）において唱えるべき偈頌として〈文殊仏国經〉「普覆王誓願（vs. 15-16）」、あるいは〈入行論〉cp. 5. vs. 21-22を挙げる。以下のとおりである。

「〔発心を受ける儀軌には、加行・本行・後の三つのうち、第一、〕加行のときに、善知識

が知を良く導いて、七支分〔の供養〕をすべきことと、善知識に祈願した。〔すなわち〕祈願は、『律儀二十の註釈』に出ているのと同じです。〔第二、〕本行のときに、彼の句を繰り返した、あるいはまた自己が述べるべきです — 〔すなわち〕「軌範師よ、思ってください。私〔すなわち〕名をこういうものは」と述べた。『文殊師利国土莊嚴經』に出ている冒頭の二偈頌、または『入行論』に出ている「かつての」というのなどにより受けた。」

Cf. ツルティム、藤仲〔2007〕pp. 328-329註81

- (65) P. zhal, D. sngar 北京版の読みを採用した。
- (66) P. bsams na, D. bsags na デルゲ版の読みを採用した。
- (67) 文殊菩薩の伝統である「大波濤行」に関する原初的記述と思われる。対応する諸漢訳に「大波濤」の語はでない。詳細は拙稿前掲印仏論文に掲載した。なお弥勒菩薩造、唐玄奘訳『瑜伽師地論』『攝決分中声聞地之四』には、輪廻と大海との相似性が記されている (Cf. 『大正蔵』29, No. 1579, p. 688a)。以下のとおりである。
「復次五法相似生死大海得大海名。一処所無辺相似故。二甚深相似故。三難渡相似故。四不可飲相故。五大宝所依相似故」
華嚴經の伝陳那著〈行願讚釈〉v. 4には以下のように出る (Cf. 拙稿「阿弥陀仏信仰の展開を支えた仏典の研究 (1)」(『浄土宗学研究』32、2006、pp. 13-14)。
「(D. Nyi. 185b1) (P. Nyi. 214b7) さて口による敬礼とは、「彼らに対する尽きない〔海のような〕讃嘆 (de dag bsngag pa mi zad)」といったこと等々がある。「彼ら (de dag)」とは如実に信解すべき者たちである。最終的にも超えないのだから (gong ba med pas na) それは尽きない。「海のような讃嘆 (bsngags pa rgya mtsho)」とは、海のような功德である。彼らに対する讃嘆は海のようにであり尽きない。「讃嘆 (bsngags)」とは功德の同義語である。「海 (rgya mtsho)」とは多の意味として理解すべきである。」
- (68) 実叉難陀訳は偈頌から外れた一文を載せる。以下のとおりである。「爾時雷音如来為普覆王。而説頌曰」
- (69) P. pos, D. po デルゲ版の読み採用した
- (70) P. des, D. ngas デルゲ版の読みを採用した。後続でも両版の読みは踏襲される。北京版の場合、主語は「かの大王」となる。実叉難陀訳：我亦於往釈、不空訳：我昔於過去であり、デルゲ版に一致する。
- (71) 実叉難陀訳：応堅固、不空訳：応勇猛
- (72) 【出典原拠】梵本 Bendall〔1977〕p. 13, l. 18-19 「yāvati prathamā koṭiḥ saṃsārasyāntavarjitā / tāvat satvahitārthāya cariṣyāmy amitāṃ carim / /」
実叉難陀訳：尽未来際、不空訳：乃至本初際
- (73) 【出典原拠】梵本 Bendall〔1977〕p. 14, l. 1-2. 「utpādayāma saṃbodhau cittaṃ nāthasya saṃmukhaṃ / nimantraye jagatsarvaṃ dāridryān mocitāsmi tat / /」
- (74) 「一切諸仏を欺いたことになろう (sangṣ rgyas thams cad bslus par 'gyur)」という誓願形式は、〈阿閼佉国經〉と共通する。〈無量寿經〉とは一致しない。
- (75) 【出典原拠】梵本 Bendall〔1977〕p. 14, l. 3-4. 「vyāpādakhilacittaṃ vā irṣyāmātsaryam eva vā / adyāgre na kariṣyāmi bodhiṃ prāpsyāmi yāvatā /」
- (76) 【出典原拠】梵本 Bendall〔1977〕p. 14, l. 5-6. 「brahmacaryaṃ cariṣyāmi kāmāṃs tyakṣyāmi pāpakān / / buddhānāṃ anuśikṣiṣye śīlasaṃvarasaṃnyame /」
- (77) 【出典原拠】梵本 Bendall〔1977〕p. 14, l. 7-8. 「nāhaṃ tvaritarūpeṇa bodhiṃ prāptum ihot-sahe / / parāntakoṭiṃ sthāsyāmi satvasyaikasya kāraṇāt /」
- (78) 【出典原拠】梵本 Bendall〔1977〕p. 14, l. 9-10. 「kṣetraṃ viśodhayiṣyāmi aprameyam acintiyam / / nāmadheyam kariṣyāmi daśa dikṣu ca viśrutam /」
実叉難陀訳：当令我名号 普聞十方界、不空訳：称揚彼名号 普聞十方国
- (79) 授記の分類に該当するのか。

- (80) 【出典原拠】 梵本 Bendall [1977] p. 14, l. 11-12. 「kāyavākkarmaṇī cāhaṃ śodhayiṣyāmi sarvaśaḥ / / śodhayiṣye manaskarma karma karttāsmi nāśubham /」
北京版、デルゲ版とも spyad, sbyang の区別がつかない。意味・文脈を考えるならば spyod。
実叉難陀訳：不令起諸惡、不空訳：不応起不善
- (81) 言説の正当性、成就の証明として奇瑞が描写されている。
Cf. 若原雄昭「大乘仏教に於ける真実語 (satyavacana)」(『仏教学研究』56、2002)
- (82) P. yis, D. yi デルゲ版の読みを採用した。
- (83) 阿羅漢の「所作成弁」と対比的である。
- (84) 変化身としての成道相への言及。
- (85) 実叉難陀訳：供養彼諸如来、不空訳：なし
- (86) D. kyi, P. kyis 北京版の読みを採用する。
- (87) 実叉難陀訳：地持、不空訳：地
- (88) 実叉難陀訳：諸声聞衆、不空訳：声聞之所圍繞
- (89) 実叉難陀訳：宿縁、不空訳：往昔事
Cf. Lokesh Chandra, *Tibetan-Sanskrit Dictionary*, Rinsen Book Co., p. 649a [sngon byung ba] 1. itihāsaka, 2. pūrvayoga, 3. bhūtapūrva
Cf. 村上真完「Pūrvayoga について」(『宗教研究』42-3、1969)、同「Pūrvayoga (過去の因縁) — 大乘經典における過去因縁物語に関連して —」(『密教文化』95、1971)、北條竜士「『悲華經』における Pūrvayoga」(『仏教文化研究』51、2007)
- (90) ここで実叉難陀訳、不空訳は巻中が終わり、以後、巻下に入る。
- (91) アビダルマ説を前提とする。
- (92) 漢訳は「増減」を出す。
- (93) P. yang, D. なし
- (94) P. shes bya, D. zhes bya
不空訳：以何因縁知法円満 不空訳に沿えば「rdzogs pa shes bya」となるはず。
- (95) P. de , D. da 実叉難陀訳、不空訳に「今」があるので、デルゲ版の読みを採用する。
- (96) Skt. pada には「句義」と「位」の義がある。
- (97) 「得るべきこと (所得)」と「現観」とを対に出して議論するものに〈入中論〉cp. 6がある。厳密には教証として引用する〈二万五千頌般若〉に出る (Cf. 小川一乗『空性思想の研究』(文栄堂、1976、p. 316))。
- (98) 部派仏教では、四諦の現観、あるいは一切智における一刹那での現観の不可能なことが議論されており、ここでは空思想より論じられている。Cf. 櫻部建、小谷信千代『俱舍論の原典解明—賢聖品—』(法蔵館、1999、p. 12-13)
- (99) 空一味のようなこと。
- (100) 煩悩ではない。認識作用である。
- (101) gnas pa ではなく gnas。

〔主な参考文献〕

沖本克己

・『沖本克己仏教学論集 〈第一巻・インド編〉』(山喜房仏書林、2013)

佐藤直実

・『藏漢訳『阿閼佉国經』研究』(山喜房仏書林、2008)

ツルティム・ケサン、藤仲孝司

・『悟りへの階梯』(UNIO、2005)

・『解脱の宝飾』(UNIO、2007)

長井真琴訳

- ・『宝積部三』(「国訳一切経印度撰述部」、大東出版、1971 (初版1930) pp. 257-303) →唐実叉難陀訳を扱う。

中村元、増谷文雄

- ・『大乘仏典抄 (二) 本願と浄土』(「仏教説話体系」29、鈴木出版、1985)

藤田宏達

- ・『浄土三部経の研究』(岩波書店、2007)
- ・『梵文無量寿経・梵文阿弥陀経』(法蔵館、2011)

光川豊藝

- ・「文殊菩薩とその仏国土 — 『文殊師利仏土厳浄経』を中心に—」(『仏教学研究』45・46合併号、pp. 1-32、1990)

山本侍弘 (弘史)

- ・「Ambararāja (文殊師利) の発菩提心偈 —中観儀礼の一側面—」(『論集』32、2005)

Cecil Bendall

- ・*Śikṣāsamuccaya*, 名著普及会, 1977

H. Kern and Bunyiu Nanjio

- ・*Saddharmapuṇḍarīka*, 名著普及会, 1977

〔付記〕 藤仲孝司氏から多くの御教示を頂戴した。

(なかみかど けいきょう 非常勤講師)

2013年10月31日受理